はじめに

オカルトブーム再来!?

ブームは数年おきに巡ってくるといいますが、さまざまなコンテンツでオカルトジャンルが目につくようになりました。

「怖い話が好き」「呪術に興味がある」と公言すると、まるで宇宙人を見るかのような視線を浴びていた学生時代を過ごしたわたしにとって、とてもいい時代になったと感じます。

さて、みなさんは「呪い」という文字をどのように読みますか？

【のろい】？　それとも【まじない】でしょうか？

ではこの二つの言葉にはどんな違いがあるのでしょう。

同じ「兄」というつくりを使った文字に「祝い」があります。

あくまでもわたしの考えになりますが、たとえば自分が「幸せになりたい」と思うのが【呪い】、誰かに「幸せになってほしい」と願うのが【祝い】、他人を見て「どうしてあの人はわたしよりも幸せなのか」と妬むのが【呪い】なのではないでしょうか。

それらの「想い」が力になったものを「呪力」、力を使うための方法が「呪術」だと考えます。

……あくまでもわたしの考えなので、違うかもしれませんが。

今回はその「呪術」を生業としてきた人たち【陰陽師】について書いていこうと思います。

いろんな媒体で紹介されることの多い能力集団【陰陽師】。

その中でも特に有名な安倍晴明を中心に、彼らが残してきた物語をたどってみましょう。

橘伊津姫

もくじ

陰陽師

■安部晴明……4

■安倍晴明、忠行に随いて道を習う語……6

■晴明が蔵人少将の憑き物を追い払うこと……14

■蘆屋道満……26

■蘆屋道満という男……28

■道長と晴明と白い犬……52

陰陽師……68

式神……70

セーマン・ドーマン……73

急急如律令……73

追儺……74

泰山府君祭……74

方違え……78

結界……78

さまざまな占術……79

陰陽師の道具……80

イザナギ流　不動王生霊返し……81

百鬼夜行……82

現代に残る陰陽道……83

陰陽師 おんみょうじ

■安倍晴明

さまざまな小説やコミックで大活躍の安倍晴明。日本で一番有名な陰陽師といっても過言ではないでしょう。多くの作品に登場する安倍晴明は青年期の姿で描かれることが多いですが、実際に彼が陰陽寮の天文得業生（学生）になったのは四十歳頃からといわれており、この時代の平均寿命を考えると異例のことだと考えられます。

そこからメキメキと頭角をあらわし、やがて天文博士に就任し天文部のトップまで昇りつめます。さらには陰陽博士に就任し、八五歳で天寿を全うするまでに五人の天皇に仕えました。

幼少期から見鬼の才（鬼を見る力）がずば抜けていたとされる晴明は「母親は信太の杜に住む白狐・葛葉である」と噂されるほどでした。

晴明の能力の高さを伝える物語の中には、師匠である賀茂忠行よりも先に百鬼夜行に気づいて術を使い、師匠一行を災いから守った話も残されています。

父親については諸説あり、有名なのは前述の葛葉狐を娶った安倍保名が父親であるというものです。その他に宮中の料理人であった大善大夫・安倍益材であるという説もあります。

優秀な人材である安倍晴明は花山天皇や一条天皇、そして藤原道長などの宮廷の中心にいた重要な地位の貴族たちに重用されました。

■安倍晴明、忠行に随いて道を習う語

平安時代、天文博士に任じられた安倍晴明という陰陽師がおりました。

歴代の高名な陰陽師にも恥じぬほどの腕前を持っておりました。

幼い頃から賀茂忠行という陰陽師にも師事し、昼となく夜となくこの道を修行しておりましたので、心もとないことなどいささかもございませんでした。

この晴明が若い時分のこと。

ある夜、師である忠行が下京方面に出かける際に供を言いつかり、ゴトゴトと進む牛車に歩いてついていきました。

忠行は昼間の疲れからか、車に揺られるうちにすっかり寝入ってしまいました。

暗い夜道を松明をかかげながら歩いていた晴明でしたが、ふと何かの気配を感じて顔を上げますと、前方からこちらに向かって恐ろしい姿の鬼どもがやってくるではありませんか。

驚いた晴明は慌てて、車の中にいるはずの忠行へと声をかけました。

「もし、御師さま、御師さま、大変でございます。どうか起きてください。道の向こうより鬼どもがやってまいります」

これを聞いた忠行はパッと目を覚まし、御簾をわずかにめくって鬼どもの姿を認めると、すぐさま牛